

パリス・ボルドーネのアウクスブルク滞在

——シュマルカルデン戦争(1546-47年)後のバイエルンにおけるヴェネト画家の活躍——

久保 佑馬(東京大学)

ティツィアーノ、パリス・ボルドーネ、ランベルト・シュストリス、ジャン・パオロ・パーチェ、ジュリオ・リチーニオ。1540年代から1560年頃にかけて、南ドイツの帝国都市アウクスブルクには、上記のような画家たちが、ヴェネト地方から相次いで来訪した。中世以来、商業的・文化的結び付きが強かったヴェネト-バイエルン間の交流史にあっても、この時期の南から北への纏まった画家の移動は、特筆に値する。そこには、二つの動機が関係していた。一つは芸術家側の訪問動機で、1548年と1550-51年のティツィアーノによるバイエルンでの華々しい活躍は、ヴェネトの同業者たちを確実に魅了していた。もう一つは、彼らを招聘したバイエルンの美術収集家・愛好家たちの動機である。フッガー家のような新興商人は都市社会の中で自らの地位を確立すべく美術を必要とし、オットー・トルクセス・フォン・ヴァルトブルク枢機卿のような対抗宗教改革の第一人者も、シュマルカルデン戦争(1546-47年)後の南ドイツでカトリック勢力の優位を保つべく、美術による権威付けを欲していたのである。

本発表で考察するのは、トレヴィーゾ出身のパリス・ボルドーネ(1500-71年)の事例である。ティツィアーノ工房で修業時代を送りながらも師と袂を分かち、1520年代以降イタリア内外で独自の画業を切り拓いたこの画家は、伝統的に1540年頃アウクスブルクを訪問したと考えられてきた。しかしその年代根拠とされる《トーマス・シュターヘル肖像画》(1540年、ルーヴル美術館)は、肖像主の情報や様式分析をもとに、制作地が見直されるべきである。今回発表者が新たに提唱するのは、彼のアウクスブルク訪問を1551-53年頃とする説である。1548年アレティーノ書簡、画家の様式変遷、同地で交流したオットー枢機卿の活動、バイエルンの政治状況等を考慮すると、この年代推定が最も蓋然性が高い。

彼のアウクスブルクでの制作絵画は、《剣闘士の闘い》(ウィーン美術史美術館)を除いて特定が難しいが、今回はフッガー家に宛てて描いた可能性のある《マルス、ウェヌス、クピド、有翼の勝利》、《マルス、ウェヌス、クピド、フローラ》(共にウィーン美術史美術館)、《ディアナ、ニンフ、アクタイオン》(ドレスデン空襲で破壊)等を採り上げ、これらの作品群が、1540年頃よりも1551-53年頃の彼の作風に近いと指摘する。また年代推定の根拠になり得る作品として、1552年からアウクスブルクに滞在していたランベルト・シュストリスの《ウェヌスの水浴》(ウィーン美術史美術館)も挙げたい。この絵画は、シュストリスがセバスティアノ・セルリオの建築書から多数の挿絵を引用した唯一の作例で、パリスからの直接的な影響・助言が想定されるからである。

パリスのアウクスブルク訪問を1551-53年頃と位置付け直すことで、彼もまた、ティツィアーノのアウクスブルク滞在后、シュマルカルデン戦争後の文脈でバイエルンへ招聘された画家の一人であったと結論づける。